

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 劉 菁菁

論文題目 和歌集における「羈旅」の部立と官僚たちの旅歌  
——『万葉集』から『古今和歌集』へ——

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 胡 潔  
委 員 名古屋大学教授 涌井 隆  
委 員 名古屋大学教授 星野 幸代  
委 員 お茶の水女子大学名誉教授 平野 由紀子

本論文は、古代日本の和歌集における羈旅歌の形成過程を考察することで、和歌集の編纂意識、分類意識と秩序観を解明しようとしたものである。「羈旅」は「旅行、寄寓して客分となること」を意味する語で、中国の漢詩集では一つの詩語として用いられているが、日本の和歌集においては異なる意味と役割を持っている。『万葉集』では、君（天皇）の旅歌に対する臣（官僚）の旅歌の題詞名に用いられ、『古今和歌集』では、「旅中の歌」の部立名に用いられている。古今以降の和歌集になると、「羈旅」の、「官僚の旅」という意味が徐々に失われ、天皇、公卿、女性歌人、僧侶などあらゆる身分の人々の旅を指すようになり、題詠の歌題になった。これまでの羈旅歌の研究は、ある歌集また歌巻に限定した論考が主であったが、本論文は、奈良時代から鎌倉初期にいたる長い期間を通して、和歌集における羈旅歌の形成と変遷を体系的に明らかにしたものである。論文の構成は、研究史を概観し研究課題と方法を提示した序章と、総括を行った終章のほか、『万葉集』の和歌を扱う第一部の三つの章、平安時代の漢詩集および和歌集を扱う第二部の三つの章から成る。

第一部第一章では、まず、和語の「たび」と漢語の「羈旅」の意味上のズレを明らかにした上で、『万葉集』の巻三の羈旅歌群について論じる。和語の「たび」は、主に旅中の苦渋によって生じた身体的な感覚を表す語であるのに対し、漢語の「羈旅」は、身体的な感覚というよりむしろ精神的陰影を表す語である。漢詩文において、「羈旅」は常に孤独感や不遇意識とともに用いられるが、詩集の部類名にはならない。一方、和歌集における「羈旅」は、最初から臣（官僚）の旅という政治的意味と数首の歌を束ねる題詞として用いられる。『万葉集』巻三の雑歌に分類された柿本人麻呂羈旅歌八首と高市黒人羈旅歌八首は、それぞれ西へ行く旅と東へ行く旅で詠まれたものであり、大和から離れる官僚の旅歌を表している。歌の内容からみれば、旅の移動中に詠まれたもので、漢語「羈」の持つ「(旅先に) 滞在する」の意とは異なる。中国の漢詩文と万葉集巻三の「羈旅」の用法を比較分析することで、『万葉集』巻三における羈旅歌は、君主（長官）—臣下（部下）という二元的構造で用いられて、臣下（部下）の旅歌を意味するものだと指摘した。

第一部第二章では、『万葉集』の巻七と巻十二にある作者未詳の羈旅歌を考察する。巻七の雑歌部に「羈旅作歌九十首」、挽歌部に「羈旅歌一首」が収録されており、巻十二には「羈旅発思歌五十三首」が収録されている。本章では、両巻の羈旅歌がそれぞれ異なる部立に属していることに注目し、羈旅歌と「死」、「恋」の関わり方及び編纂者の分類意識を探った。巻七の「羈旅作」の歌は叙景性が高く、土地讃美の表現が多く用いられている。論者は、この叙景性は、国見歌を母胎とした日本の旅歌の特徴であり、漢語「羈旅」の持つ、不遇意識や憂鬱感と相反するものだと指摘した。また挽歌部の「羈旅歌一首」に関して、従来の議論を踏まえつつ、旅中で亡くなる者を悼む「行路死人歌」との関わりを分析し、羈旅歌と挽歌の緊密な関係性を明らかにした。一方、巻十二の「羈旅発思歌五十首」（旅立つ男の歌）は、その前に配列された「悲別歌三十一首」（残される女の歌）と対称的關係をなしており、羈旅歌と相聞歌の親和性を示している。巻七の「羈旅作」と巻十二の「羈旅発思」は、それぞれ相聞と雑歌の部立に属しているが、いずれも男性（恐らく官僚）が旅に出た時の歌である。論者は、この両巻にみられる「恋」「死」「旅」の諸要素の混在は、人為的になされた歌の分類と歌の実態の間に存在する齟齬を反映したものと指摘し、さらに『万葉集』の段階では、

統一した編纂基準が形成されておらず、早期の羈旅歌は未だ相聞歌や挽歌から分化されていないと指摘した。

第一部第三章では、「家持の歌日記」と呼ばれる『万葉集』の末四巻（巻十七から巻二十の四巻）を取り上げ、大伴家持とその周辺の歌人が詠む遊覧歌、餞別歌を中心に論じる。論者は、まず巻十七の冒頭に配された、大伴旅人の僉従らの「悲傷羈旅」の歌群について、巻三の羈旅歌に見られる君と臣の二元的構造はここでは長官と部下の関係に用いられることで、『万葉集』における「羈旅」の持つ階級性が再び強調されたと指摘した上で、末四巻の餞別歌と遊覧歌について論じた。万葉末期は、和歌文化から漢詩文化へと移り変わる過渡期であり、末四巻には中国漢詩の影響が強く見られる。「餞別」は地方官制度の実施に伴って生まれた新しい文学主題であり、宴という場で詠まれた餞別歌は、別れの悲しみより開催される季節や環境を詠んだものが多い。一方、家持の遊覧作は、二種に分けられ、一つは虚構の長歌であり、もう一つは任地で遊覧する際に詠まれる短歌である。この二種の遊覧作は、「楽しく遊ぶ」という官僚の新しい旅文化を作り出したが、中国の遊覧詩にある不遇や嘆老といった内容はあまり見られない。男性官僚たちが宴や旅で詠みあうという文学形式は、万葉初期の天皇（君主）—官僚（臣下）という二元的構造から、部下たちが長官を囲むという円型の構造へ移行しつつあることを示したものであり、官僚同士の連帯感を強める役割を果たし、さらに平安前期の勅撰漢詩集の「遊覧」と「餞別」の成立の土台を作った、と論者は結論づけた。

第二部第一章では、平安前期に成立した『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『新撰万葉集』、『大江千里集』を中心に、漢詩創作の面から『古今和歌集』成立以前の「旅」と「別」について考察する。勅撰三漢詩集にある遊覧詩と餞別詩は、殆どが天皇主催の宴で詠まれたものであり、万葉末期の家持とその周辺の官僚文人の作品に見られる応酬的な性格を継承している。『文華秀麗集』には「遊覧」と「餞別」の部が設けられ、その冒頭に、嵯峨天皇の詩が置かれ、天皇を中心に臣下が天皇を囲むという円型の構造が示されている。このような君臣唱和の詩宴で詠まれた旅愁と隠逸的心情は実詠ではなく、中国詩の表現を用いて、離別や旅の体験を創作して詠んだものが殆どである。一方、九世紀末に成立する『大江千里集』になると、「遊覧」の部には自然風景を詠んだ詩句、「離別」の部には、白居易や元稹などの男性官僚が詠んだ離別詩の詩句が多く収録され、編纂者大江千里の「遊覧」、「離別」に対する認識が示されている。論者は、勅撰漢詩集および和漢兼作の詩歌集における「遊覧」と「離別」を考察することで、中国漢詩の諸要素、特に男性間で詠みかわす贈答詩が、万葉末期の大伴家持を中心とした官僚文人たちの創作活動や平安前期の勅撰漢詩集、さらに『新撰万葉集』、『大江千里集』などの和漢兼作集を経て、『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」に大きな影響を与えたという過程を明らかにした。

第二部第二章では、『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」の部立の成立を考察し、古今撰者の「羈旅歌」を設ける選歌基準、編纂意識を明らかにする。平安時代の官僚の旅の実態と『古今和歌集』の編纂方針を検討した上で、古今集の「離別歌」と「羈旅歌」は、「人と別れてから旅に立つ」、「都から離れる旅中の歌」という時間軸上の前後関係で設けられた歌巻であり、「死」を詠む哀傷歌と「恋」を詠む恋歌から分離された。羈旅歌には遣唐、流罪、赴任、従駕、遊覧など異なる目的を

有する旅の歌が収録されており、旅の多様性が示されている。歌の内容から見ると、巻の前半は旅愁を詠む歌であるのに対し、後半は旅興を詠む歌である。官僚の旅歌を主として、安倍仲麻呂、小野篁、在原業平、菅原道真などの歌が収められており、中央政権から逸脱した人々の旅歌のあり方が示されている。官僚の旅歌が主であった点では万葉の羈旅歌の性格を継承しているが、朝廷のある都への帰還願望を詠んでいる点は家へ帰りたいと詠む万葉集の羈旅歌とは一線を画している。このことから、都から離れて旅に出ることは中央政権から逸脱することに等しい、という考え方が形成されていたことが考えられる。

第二部第三章では、『古今和歌集』以後の勅撰和歌集の羈旅歌について考察する。『後撰和歌集』の「羈旅」の部に宇多院の歌が入集している点で、羈旅歌は官僚の旅歌という選歌基準とは別のものとなった。以降「羈旅歌」の収録範囲が拡大し、詠み手も太上天皇、公卿、女性歌人、僧侶など様々な身分の人になり、特に平安末期から鎌倉初期にかけて僧侶が主流となった。内容面においても、参詣の旅、僧侶の旅の歌が増え、実詠から題詠に移行していく傾向がみられる。論者はとくに『新古今和歌集』の「羈旅歌」に収録された流罪者の歌や僧侶の歌に注目し、政治の敗者と出家人が詠む孤独感や不遇意識など内面的な感情が中国詩人の詠む「羈旅」に近いものがあり、その接近の理由として、平安末期、鎌倉初期の社会背景が中国六朝時代に近いことや仏教思想の影響を挙げた。論者は、古今集以降の勅撰和歌集の羈旅歌の収録範囲、詠み手、詠まれる内容を分析することによって、「羈旅」という語に付随する感情的な要素が、都から離れる悲しみから、世俗に背を向けるという厭世観や無常観に変化した過程を明らかにした。

以下、論文に対する評価を述べる。

本論文は、日本、中国の文献資料を駆使しながら、奈良時代から鎌倉初期にいたるまでの和歌集における「羈旅」という語の受容と変容の推移を追うとともに、羈旅歌の編纂意識、律令制下の官僚の旅及び旅をめぐる創作活動などについて多面的に考察したものである。従来体系的に取り上げられてこなかった羈旅歌の展開の軌跡を比較研究の方法で浮き彫りにした点は新しい成果として評価できる。とくに旅をめぐる男性官僚間の贈答詩の方法がいかに万葉末期の相伴家持らの創作活動や勅撰漢詩集時代の詩宴、さらに『新撰万葉集』、『大江千里集』などの和漢兼作集を経て、『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」に影響を与えたのかを明らかにしたことは今後の研究に寄与するものである。また、研究テーマが明確で、整然とした構成を評価する意見もあった。一方で、羈旅歌の官僚的性格に注目しながら歴史的な考察が十分展開されていない点、第二部第三章は古今集以降の羈旅歌の変容過程を解明することを意図して書かれているが、その意図が十分に達成されていない点などの問題点が指摘された。一部の用語の使用についても指摘され、より正確な論述を心がけるよう要請された。しかし、これらの点は、今後、論者の研究のさらなる進展によって解明され、改善される課題に属するものである。よって、論文審査員全員一致で博士学位論文として十分その水準に達していると判断した。